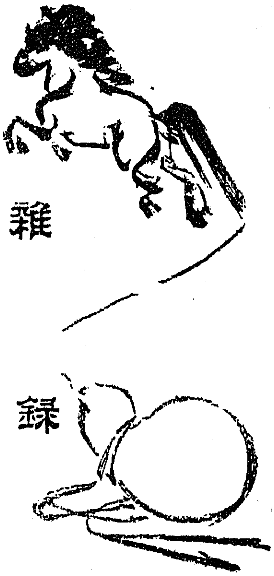
は生れて二ヶ月以上の子供を預る、ペスタロッチ、フレベルハウスでは生れて六週間以上三歳になるまで預つて、二十片此方で言へば十錢で預かる、一週間ならば一マルク五十錢である人民……下層の人民がドウしてこの金を出すと言はるゝか知らぬが。向うで物價の比較上一日二十片一週一馬克は高い金額でない、籠に入れて置き泣く兒を搖してもりし又牛乳を飲ませオシメも換へてやる、少し大い子供には部屋で玩具を持たせて遊ばせて居る、佛蘭西でも獨逸でも同じにやつて居る、日本では斯ういふのを見ませぬが、或は斯ういふ事が必要であらうか貴方がたの御研究になつて居る所からドウ云ふものでありますか御參考に申して置きます。簡單な話で纏まらぬ話でありました。



雜録

鹽津みやげ（その三）

和歌子

●八月のある夕、をばさんが自身の單衣を疊んで居るのを見て、ふみ子（三年二ヶ月）は其自分のと違つて紐のついて居ないことに氣が付き、曰く「アタシモオキナツタラ紐ノツイテナイノキマスワ」と、をばさん「エーソーデス子、大キクナツタラヲバサンノミタヨーナキモノヲキナサイ」ふみ子又「ヲバサンガ小ソナツタラ紐ノツイタノキルノ

?」をばさん答へて曰く「ヲバサンハモー小サクナリマセンアンタハダン〳〵大キクナルノデス」と、なほ大人は幼兒にかへらぬといふ事を說明したけれども、まだふみ子の心の底には小が大となるに對して大が小となるもの丶やうに疑問があるらしい。一体ふみ子は鋭敏に反對の側を考へるので、「アンタハ小サイカラ」と言ふと「大キクナツタラハ?」と問ふ。「アソコヘユクトアマリ暑イカラ云々」と言ふと「凉シカツタラハ?」と問ひ返す類で、反對の場合には如何にするかといふやうな事を必ず問ふ。

●又八月のある日、清子(七年九ケ月)千代子(六年六ケ月)英夫(四年二ケ月)の外に、いつもは家に殘して行くきみ子(一年六ケ月)をも連れて海水浴に行く。さて皆で海水中にはいつた處、きみ子は生後はじめて海水に浴する事とて、抱かれながらチャブ〳〵〳〵と言つては兩手で海面を打ち大喜である、家に歸つてから阿母さんに「キミドコヘイテキタノ」と問はれて「ターンタタンタ」とくり返す、此人には今の處大海原も町の湯屋も皆等しくタンタ(方言俗湯の事)なので、さて〳〵罪のないも　ある。

清子は何でもきれいなとか立派とかいふ事を、金蘭緞子の樣なと形容する僻があるので、此日も濱で壯快に大浪小浪の寄せるのを見て、子供ながらに美に打たれたといふ顏付で「アレ〳〵キレーナ浪キンランドンスミタイナ!」

●又八月のある日、清子(尋常小學二年生)千代子(同一年生)の二兒は習字をする。一兒が書く時一兒を傍に置くと、實に遠慮會釋なく縱橫無盡に

批評する。それが又中々よく當つた事を言ふ。千代子はまだ片假名の一部しか書けぬので、淸子の書く平假名や漢字を見て感心して、見入つて居るのが常であるが。時にはふと「ソンナ字テナイワ、ソンナサテユー字ナイワ」など丶、我知らぬ字を見て鎗横を入れる。此日可笑しかつたのは、千代子にキミと書けるかと言うた處が、先生、キの字は書けたがミは書けぬ。「アタシシランエ」と言ふこと思へば「ホンナラキニチヨボウトカ」とたづねる。「キニチヨボヲウツタラギト言フノデミト言フ字ハ別ニアル」と言つた處が「フーン、ホンナラキニ。カコカ」と、は行には濁點も半濁點もうつべき事を知れる彼れは之をキにまで應用したので。

●淸子がはる〲京都から携へ來つた國語敎科書を取り出してサッサと讀む時には千代子もきつと自分のを出して、われ劣らじと聲張り上げる。處が淸子のには、太郎がどうしたとか、お花がこうしたとか、多少復雜な事が書いてあるのにも拘らず、千代子のにはフエ、タイコ、ユミトヤ、など丶至極簡短な事しか書いてない。そこで双方正しく讀み出して二三分もすると、千代子の方がきつと、自分の本の書を見ながら之を復雜に、たとへば「フエヲフイテタイコヲタ丶キマシタ」とか、「コ丶ニユミトヤヲカイテアリマス」とか、自已流に附け加へて讀むのが例で、すると弟の英夫も何か讀みたくなるが、まだ字といふものは一字も讀めぬ、しかたなしに自分の書を書く帳を持つて來て、之に相應した事を作り出して本を讀む調子に聲高く讀むのも亦例である、つまり淸子は字を

讀む、千代子は字と書を讀む、英夫は書を讀むといふ事になるので、之をだまつて聽いて居るのは中々おもしろい、時には三兒が一生懸命に讀んで居る間にをばさんが、御祖母さんや阿父さんや阿母さんに注進して、皆でかの讀聲を聽いて笑ふ事がある。

●又八月のある夕方、をばさんは清子千代子英夫ふみ子の四兒を連れて家の後の山に上る。小さな足が一生懸命に運ばれて頂上に達した時の愉快さ日は漸く西に舂いて一分々々に赤く大きくなつて行く、前なる海原は鏡のやうに見下される、誠に壯快な景色で小さい人達さへ此廣大な自然の美に感じたらしい顔付。かねてをばさんが此兒達に雲の美を知らしめんことを望み常に指示して其美を語つて居る結果、今夕は子供の方から言ひ出して「アソコハ桃色」「アソコハ鼠色」など、楓のやうな手で大空を指しては語り合つて居る「オテントーサマ大キーノマー」「アノ赤イノ」などと太陽の美觀をも語つて居る。遂に清子の言ふ「アンナエー色ノ紙ヲホシーナー」と、子供の目に最も華やかに美はしく見えるべき雲の部分を指しつゝ。

さて何時の間にかまんまるい御月樣が後に上つていらしつたのを第一に發見したのが千代子、忽ち「大キナ御月サン！　オー月サーマエーライナ、オーヒーサマノー兄弟デー」と發聲する。一同之に合唱する。之が唱歌のはじまりで桃太郎やら水鐵砲やら色々歌ふ。君が代をと清子の發起に、即ち一同月に面して整列し謹で頌する。山、月、子供、君が代何といふ平和な時ぞ。歸途には一同花のいろ〳〵を小さい手に餘るまで摘みため、をば

さんの春に在るふみ子にも三兒から贈る、花を愛し人を愛して幼兒達が山道を歩いて居る樣は一の邪念なき自然の人と言はうか。まるで天使のやうと言はうか!?

きっす

や、て、

接吻は西洋に於ける一の禮儀慣例として廣く行はるゝは人の知る所なり、近時一米人之につきて記述せるを見たり。即其の大要を記す。敢て徒らに「ハイカラ」風を吹かさんとにあらず。

接吻は疑ひもなく、家族的親愛を表明する最初のものの一にして、夫婦親子が之を以て其の感情を漏らす天然の手段なり。吾人は實に彼の禽獸に於て此の本能を有するを見るなり。

接吻は國によりて稍趣きを異にす。佛蘭西に於ては頬部に限り、主として一家族中の男子の間に或は親友の間に差別なく交換せられ。伊太利も稍之に類す。英米に在つては男女の別なく之を施こすが故に往々にして亂雜の譏を免れず。獨乙に於ては男性の間にのみ行はるゝを普通とす。

そも接吻の事たる人性本能より出で自然に起りたるものにして、漸々社會文化の進歩と共に其の使用を家族以外に及ぼし、男子間に限りて禮儀上之を用ひ、以て尊重崇敬平和好意の情を表はすに至り、遂に今日に進みしなり。

古くはペルシャのサイラス王も其の叔父を尊敬せんとて之をなしたり。又アラビヤ人は古來今日に至るも尚髯の端を接吻する舊慣あり。英國に於

ては此の風百年以前より大に行はれ、他家を訪問するものは必ず其の家族中の總ての女性に接吻するに至れり、而して今尙或る田舍の地方に此の餘習を存すと云ふ。

古代基督敎徒の間にも常に行はれたりしなり。彼のセント、ポールがコリンツに於ける信徒に送りたる書には、「爾來神聖なるキッスを以て相互に祝すべし」とあり。此の習慣は僧徒より敎會一般に及び、男子は男子と、女子は女子との間に之を交換せり。羅馬敎會に於ても新改宗者ある每に之に接吻を施こし、殊に聖餐執行の時に於ては其の交換甚だ雜駁にして弊なきにしもあらざりしかば、後には唯だ聖式を施行する僧徒間のみに限り一般の唇に接するには十字架形の物を以てなすことゝし、爲めに傳染病感染の患を減少せり。

神及び皇帝に對しては　各自自身の手に接吻す初羅馬帝は朝臣をして其の手に接吻せしめしが餘り昵近に過ぐると思ひてや、後に至り唯其の衣服の緣を恭しく接吻するを容し、更に變じて臣下は各自其の手に接吻し、帝の玉座に向ひて拜禮を施すに至りしなり。惟ふにこれ疾病傳染の虞あると共に、其の威嚴を保たんが爲め、及び廷臣の危險なる陰謀を恐れたるならん。

接吻禮の由來實に此の如し。事頗る簡單にしてしかも能く情愛を發表して餘りなし、されど其の弊亦決して少なからず。あゝ此のやさしき禮法習慣の將來は如何あらん。嚴格なる道德家と優美なる禮儀家との協商それ如何。

左の日記を讀みて

天骨老人

わが友某は悲觀的の人なり、爲めに一たびは狂ひて果ては遠く都を離れし、銚子の海岸に養痾の人となり、漸く癒ゆるに至りては、身を基督敎界に投じて、頗ぶる謹直の人となりにしが、尙ほも敎會の生活に身心の滿足を得ずやありけむ、遂に其れより轉じて商業界に入りぬ、其の間僅かに七八年の短き間ながら、其の變轉せし迹の或は迅雷の如く、或は疾風の如く、或は獅子の狂ふが如く或は象の靜かなるが如く殆んど某の心事は捕捉すべからざるものあり、飄逸なるが如く、謹直なるが如き、某は全く常識の人にあらざるやの感あるなり、されども其の心の底には何物が靈活なる流れの滾々と盡きざるものありしが如きは、わが友の間にありては異彩を帶べるもの丶一人なりき。

偶々明治卅三年某が誌せし日記を取り出して讀む、元より飄逸なる某の事とて、全卷を通じて誌せるものにはあらずして、斷片零碎のものなり、されば詳しき出來事を書きたるものにはあらざれども、其が一節〳〵の間にはまたゆかしき情思の偲ばる丶あるなり、

思ふに日誌は一家の歷史、一身の歷史、有聲の紀念、まして今活ける某の身の上の事にしあればそが十年廿年の後にありて某の身の幾變化の後打ち顧みたらんには如何に興ぞ多からん、日誌は警醒社の『吾が家の歷史』の上に描かれたるもの、一月三日、得たる思想と云へる項下に「夫の死したる妻の悲哀の情」これ某が常に悲哀的の人たるが故に夫の死せる妻の悲哀につきて何事をか感

想に浮べたるもの丶如し、ひとの事かきわらねばえ知らざれど、

仝月四日同し項下に「女は實に謹むべき友なり」とあり、こは如何なる觀察より下したる事かはよく知られされども、友として交はるべきものなるも、謹まざれば誤りあらんと會得せしをにか、明かならぬうちにもこよなき味の含まるゝが如く見ゆめり、

仝月七日仝し項下に「人はPractical life and Poetical lifeを二分したる生活を爲すべし」とあり、こは詩的生活と事實的生活の間に處すべしとの意義明かにせられて面白し、大凡そ今の多くの人の生活只事實的即ち現實の境をのみ如何せんと焦りて理想の境に如何に遊ばんやとの思考少きに感しての言としてわれもいたく同情の念を灑ぐるものなり、某の今日にありて、商業界の人となりて、外國との取引き事務に忙はしく、朝に夕にデスクの前に座し、タイプライター、に倚りつゝ閑あれば、美學の研究に餘念なきを證し居るを見るなり

仝月九日の仝し項下に「今の世に正しき道行くはつまづき易し」とあり、こは少しく、語の足らざるやを感ず、世路難を言ひしものか、當世流の人の如くにならんとする某の意か、されとも短きうちに予の感せるところを以てせば、正し人は今の世に棄てらるが如きとの淺ましく悲しきを言ひ出てたるものならん、悲觀的の人には珍らしきをならねば、

仝月十六日の仝し項下に「金こそ人の品を下すものなれ」とこれも金と云ふとの一面の觀察を下し得たるものとして貴き言語なりと知るなり、

生命よりも金の貴きを説く人には味はしむべきなり、されども黄金の事其の使用の心ばえより云はじ、黄金罪なし、持つ人の心によりて禍福はわるなれ、今の世の人、黄金もつ心ばえのきたなき、禍を黄金の上に及ぼす、あはれなるをともかな、

仝月十九日仝し項下に「敵は最も有益なる朋なり」これもまた某が身にとりて親しく感したるものなるを明かに知らるゝの言なり蛇足なくも明かなるべし、

仝月廿日仝し項下に「人は平和を受くるが爲めに此の世に生る」と、よき處世の心得なるべし、謂ふにテニソンの云ひけん如く「吾人の境界は宛然暗夜に燈火を求めて啼く嬰兒の如し、啼くより外、言語の出すべきなし」との如くに、われらの世に處する上には種々の事情、境遇の如何に複雜纒綿して、燈火だになき闇にさまよへるか、されば若し一たび何等かの手段によりて、身心の平和たに得られなばいかに嬉しからん、如何に樂しからん、樂園はこゝに現はれん、某の言は永く朽ちざるべきなり、

仝月廿七日仝し項下に「無念無想、汝は學校を出てゝ後考へよ」學生としての某がかく眞面に言ひ出てたるは愛すべきなり、

仝月廿八日仝し項下に「汝は學力を養成する外に何事も望む勿れ」これもまた某が、野心滿々たる時代にありて反省的の語として注意すべきものなり、青年時代にありては燃ゆるが如き功名心は實に全身を支配し、才能にまかせて、遂にはあたらむしき青年の花の時代も實を結ばずして終るをわり、必せざるべからざるは學生の時代に於ける

用意なり、某はこゝに頗ぶる自覺せしものと云ふを得るなり、

某はかくして英文學の研究に入りて孜々として勉め、吃々として勵みぬ、時に或は抑ゆべからざる希望心の爲めに、時に無暴なる事すらありて、友の注意を受けたるをあり、某はそを直ちに快よく容れて必ず反省するが常なりき、自己の無遠慮なるを耻ぢ、自己のやゝ不遜なる爲めに多くの人に容られざるを嘆じたるをは屢々なり、其の結果は遂にまた悲觀の人となり來れるなりき

二月一日全じ項下に「人世最大の苦は死と其の後の苦とにして宇宙の苦は死てふものなり」と十九歳の某はかくの如くにして益本能の厭世思想を深ふしぬ、

あゝかくして一種の悲觀の人となりし某の其の後の傾向如何予はこれより語らざるべし、某に對してこゝに之をいふは失禮なればなり、されども悲觀的の人より流れ出でし某の言葉のうちわれは棄てがたき、意味ある文字なりとして誌しつくるを禁ぜざるなり、

思へ日誌とはよき鏡なり、若し月々の出來事、得たる思想、かりそめにも虚飾なく誌しゆかば、如何にわれとわが心の養ひの糧となるべきか、

わが友某はふかき思想の人となりて、今もなほ勵み居るなり、世に處するを幾浮沈を經て、尚はも猛然として淨き靈液を吸ひつゝ、望みの岸を仰ぎつゝ活動しつゝあるなり、某は遂に如何の人となりゆくべきか、其の悲觀の深きかれ、樂觀を見出したる某の身の上てそげにわが胸に浮び出さるとの多きをよろこぶ、